

『随想録』より

41 疑いさえしなければ

真宗では疑いを毛虫か毒虫のように嫌うているが、真宗で言っている疑いを御承知ですか。私は疑うていません、人間の仰る事と違って仏様の仰せだから、疑う処はないではないか、はいと素直に聞かして戴けばよいのだと平気でいらる方はそれでよいのだ。そうより他には考えられないのだから。

しかし調熟の光明で漸次お育てを蒙れば、底の知れない罪悪や、高さの知れない悩みが判然知らされ、疑わずにはおられなくなるのだ。

真実信心うることは

末法濁世にまれなりと

恒沙の諸仏の証誠に

えがたきほどをあらわせり

と仰おほせられてあり、又また、遇あい難がたい法ほう、聞きき難がたい法ほうと申もうされてあるが、一いち度ど位くらいは聞きき難がたかったか。寢しん食しょくを忘わすれて求もとめた事ことがあるか。

そんなにすれば自力じりきになる。それならお經きようの中なかの、設せつ満まん大だい千せん火か必ひつ過か要よう聞もん法ぼうとか、設せつ有う大だい火か充じゅう満まん三さん千せん大だい千せん世せ界かい要よう当とう過か此し聞もん是ぜ經きよう法ほうとか、十じゅう余よか国こくのささかさいいを越こえて身しん命めいをかえりみずし
て等などと、仰おほせられたのは自力じりきか。何なにをとぼけているのだ。話はなしを聞きいたり合が点てんするのは、二三
遍べん聞きけば直じきに判わかるのだ。三さん僧そう祇ぎ百ひやく大だい劫くわいの修しゆ行ぎようを聞もん信しんの一いち念ねんで解かい決けつさしていただくのだから
極ごく難なんの信しんなのだ。邪じゃ見けん憍きよう慢まんの惡あく衆しゆ生じようとも知しらず自う惚ぬれていいる人ひとを、無む我がの境きよう地ちまで誘ゆう引いん
る事ことは難なん中ちゆうの難なんなのだ。

同行どうぎようよ、私わたしは疑うたがうてはいないと簡かん単たんに考かんえていいる疑うたがいは、真しん宗しゆうでは問もん題だいにしていないの
だ。往おう生じように向むき、本ほん願がんに向むき、お助たすけに向むき、仰おほせに向むき、お浄じよう土どに向むき、自じ分ぶんの心こころの中なかに、
これこれでよいかしら、ああは仰おほるけれども、ひひよよつと墮おちちはせぬか、何なんとかならんか、どうも

さっぱりせんと危^{あや}ぶみ、氣持^きちの悪^{わる}い、二^にの足踏^{あしふ}む心^{こころ}があれば、みな疑^{うたが}いだから晴^はれてはいないのだ。

それがやむものかい、やまないから晴^はれてはいないのだ。

それが晴^はれられるものかい、晴^はれていないから親^{おや}に逢^あうてはいないのだ。

それがやんだら凡^{ぼん}夫^ぶではないではないか。それがやまなければ、摂^{せつ}取^{しゆ}されてはいないのだ。

この機^きが動^{うご}くものかい。動^{うご}かなければ開^{かい}発^{はつ}とは言^いわないのだ。

この煩^{ぼん}悩^{のう}がやむものかい、やむ煩^{ぼん}悩^{のう}とやまない煩^{ぼん}悩^{のう}があるのだ。

煩^{ぼん}悩^{のう}の事^{こと}を無^む明^{みょう}と言^いっている。無^む明^{みょう}の中^{なか}には痴^ち無^む明^{みょう}と疑^ぎ無^む明^{みょう}とがある。

無^む明^{みょう}煩^{ぼん}悩^{のう}しげくして

塵^{じん}数^{じゆ}のごとく遍^{へん}満^{まん}す

愛憎違順あいぞういじゆんすることは

高峯岳山こうぶがくさんにことならず

とは痴無明ちむみようであつて、

無明むみよう 長夜の燈炬ちやうこなり

智眼ちげんくらしとかなしむな

生死しやうじ大海だいかいの船筏せんぱつなり

罪障ざいしやうおもしとなげかざれ

とは疑無明ぎむみようを顕あらわすのであつて、前者ぜんしやは、信前しんぜん信後しんごを通じて除のぞかれないけれども、信前しんぜんでは

往生おうじやうの邪魔じゃまになるけれども、信後しんごにはご恩慶おんよろこぶ種たねとなるのだ。

後者こうしやは、信前しんぜんでは「どうも」「はつきりしない」何なんとかならぬかの不安ふあんの曇りくもであるけれど

も、消除しょうじよされた時ときが信後しんごになったので、微塵みじんばかりも往生おうじやうに対する不安ふあんが無なくなるのだ。